

Nitrocefin 法73%, pH 法23%であったが、本菌は典型的な PC ase 産生型の菌である為 ABPC に80%耐性を示し、CEPs 剤は影響を受けないので高感受性を示した。Enterobacter SP は ABPC, CEZ に耐性を示し、 β -Lactamase 産生能は Nitrocefin 法100%, pH 法22%であり、 β -Lactamase に安定と言われる CMZ の感受性が低く、ABPC, PIPC の感受性に差がある事から本菌の薬剤感受性と β -Lactamase 産生の関係は薄く、他の耐性機構によると思われる。Serratia・SP は LMOX 以外の薬剤に低感受性を示し、 β -Lactamase 産生能は Nitrocefin 法67%, pH 法50%であり本菌の薬剤感受性の差は他の耐性機構が働いていると思われる。Proteus は Indole (+), (-) 菌とも ABPC, CEZ に低感受性を示し、他の薬剤には高感受性であった。Indole (-) 菌の β -Lactamase 産生能は Nitrocefin 法が検出率が高く、Indole (+) 菌は誘導型である為、誘導をかけない検査では Nitrocefin 法で22%と低率であった。

9) Cefotaxime (CTX), Cefmenoxime (CMX), Latamoxef (LMOX) の静脈内投与による髄液内濃度について

岸田 典治・小林 啓志 (信楽園病院 脳神経外科)
皆川 信
関根 理・渡辺 京子 (同 内科)

脳血液関門がほぼ正常に機能していると考えられる術後患者に CTX, CMX, LMOX を各々単独に点滴静注にて投与し、各々の薬剤の髄液内の濃度を経時的に測定した。症例は脳動脈瘤手術—23例、脳梗塞頭蓋内外血管吻合術—5例、小脳出血脳室ドレナージ—2例、小脳膿瘍脳室ドレナージ—1例である。CTX と CMX は1回 1.0g を8時間毎にそれぞれ、15例と9例に、LMOX は1回 2.0g を12時間毎に7例に投与した。各薬剤の髄液内濃度の平均最高値とその投与終了後からの時間は、CTX: $4.7 \pm 3.4 \mu\text{g/ml}$, 60分; CMX: $1.0 \pm 0.9 \mu\text{g/ml}$,

30分; LMOX: $12.3 \pm 9.7 \mu\text{g/ml}$, 60分であった。なお、全例に術後感染は認められなかった。これらの結果から、3種の薬物の髄液内濃度は術後感染を予防する目的を充分達し得るものと考えられるが、すでに頭蓋内感染を生じている場合には、セフェム系薬剤から世代の特徴を充分考慮して使用すべきであると考えられる。

10) 当院小児科分離 A 群溶連菌感受性について

仁田原義之 (魚沼病院小児科)
岩淵 憲男・南雲 雪子 (同 検査室)

A 群溶連菌は猩紅熱をはじめ呼吸器感染、腎炎、リウマチ熱など多彩な感染症状を呈し、小児科領域で最も重要な起炎菌といえる。本菌はブ菌に比べ抗生剤に感受性が高いが、近年 EM, TC, CP に耐性株が増加していると報告されている。S. 58, S. 59年の当院小児科分離本菌の型別と薬剤感受性を検討した。S. 58年141株中 T-4, 65株, A-11, 43株が年間通して分離された。T-12は5株のみであった。その他 T-1, 6, 13, 22, 28等各数株であった。S. 59年119株中 T-12 36株, T-13 33株と型の流行が変わった。比較的狭い域でも短期間に流行株が入り潜っていることが伺えた。

薬剤感受性では、AB-PC, CEX の β -ラクタム系に耐性はないと考えられた。EM に対し S. 59年は T-12 に8株, T-13 に1株が (-) の耐性、T-12 の2株が (+) と12型の耐性が多かった。CES 系では CEX に比べ CFT が阻止円直径より感受性が高いと考えられた。

II. 特別講演

産婦人科領域の感染症の現況と化学療法

松田 静治 (順天堂大学産婦人科助教授)
江東病院副院長